

## 特集：おらほの農地集積

### 農地集積シンポジウム '99 開催

去る11月11日～12日「見てみよう！聞いてみよう！やってみよう農地集積」をテーマに仙台市太白区秋保・ホテルニュー水戸屋で、ほ場整備事業実施地区の受益者（出して農家、受け手農家）、市町村、農業委員会、JA、土地改良区、東北農政局、県関係者283名出席により開催（主催：宮城県土地連、後援：宮城県産業経済部、宮城県農業公社）された農地集積シンポジウム '99の概要を紹介します。

### 農地集積功労者に対する感謝状授与

地区の農地集積に対し積極的に取り組み、また、地域のリーダーとして特に功績があった方々に、主催者より感謝状を贈り、各氏の功績を讃えました。

氏名	役職名
森 庄市	薄木地区担い手育成基盤整備事業推進協議会会長
相沢 勲男	大松沢地区担い手育成基盤整備事業実行委員会委員長
大山 義一	五輪崎地区実行委員会委員長
磯田 敏幸	小牛田町農業委員会農地集積化専門員（中埠北部地区）
三浦 繁	志波姫町担い手育成基盤整備協議会会長（下刈敷地区）
千葉 守	登米郡豊里町土地改良区総務課長（豊里地区）
木村 雄毅	石巻市蛇田土地改良区事務長（蛇田地区）



主催者より感謝状を授与される磯田氏

### 基調講演

#### 1. 「新しい農業・農村の理想」 - わがまちになぜ新規就農者が定着するのか - …… 農業・農業作家 / 星 寛治氏



私は、水田とりんごと自給野菜と若干の牛を飼いながら、農業をやっている現役の農家です。私は、かれこれ45年間、米作りを中心として農業を営んでまいりました。少しとうのたった百姓になりましたけど、あと10年、場合によっては15年くらいは、元気で農業を続けたいと思っています。私の孫たちが成人して、21世紀の担い手になっていく時代に、おそらく今の情勢からいって、我が国は大変な食糧難の時代を迎えるのではないかと、孫たちに米、野菜、りんごなどの作り方をしっかりと手ほどきして、力を身につけさせておかなければ、その次の時代になって路頭に迷うのではないかと思うからです。それと同時に、農地をしっかりと農業関係者の主体的な力によって守り継いでいくことが21世紀の日本という社会を安定的なものにしていく最大の課題であると思っています。

今まで、たくさんの経済的な価値を掲げ、手にしたお金で物質的な豊かさを手にすることが私たちの豊かさだと思ってきました。本当の豊かさとはいったい何だろうかと。そのことを農村側から問い直していく時期に来ていると思います。また、21世紀の新しい文明は、今までと違って何よりも命と環境を大事にしていく、それを最優先する文明に成らざるを得ない、必然的にそうなっていくというように信じています。

相手をけ落として自分が生き残るといふ、そういう熾烈な競争の時代は間もなく終わりを告げ、その国の中で、あるいは国家という一つの垣根を越えて、人々が手を携え力を合わせていく。あるいは私たちのような農村地域社会にあって、大規模農家も、兼業農家とか自給的な小規模な農家もそれぞれの特徴を發揮するなら、力を合わせて豊かな農村社会を作っていくという、そういうことが次の時代の農村の理想のイメージなのではないかと考えています。

土地基盤整備においても、1枚1haの大型ほ場を整備することが全てではないと思います。私たちの住んでいる中山間地帯の高畠町では、むしろ環境保全型の基盤整備が行われなければならない。山村とか中山間地帯にはそれにふさわしい方法があるはずで、1つのものさしだけでないもう少し多様なものさしを、それぞれの地域にあてはまるようなものさしを作り、地域の農家が主体的に選択をして、より効率的な基盤整備を行うことが必要だと考えています。

私の高畠町は、田んぼの他に果物の産地でありまして、ぶどうも500ha近くありますし、りんごとカラフランスとか。柑橘類を除いてはなんでも取れるという土地柄で、地域複合が酪農野菜も含めてずっと伝統的に行われてきたところでありまして。堆肥を使わず、化学肥料だけで攻め、あとは病気が出れば農薬で叩くというやり方を続けているうちに、病気が防ぎきれなくなり、一種の連作障害みたいなものが生産の現場でみられるようになりました。

人間のとりわけ国民の生命線を支えていく農業を営む私たち農家が、最も安全で健康な方法で生産活動を行い、そこから生産された物を自信を持って消費者に届けたいということが一番大事なんじゃないかと気づき、若い農民たちと一緒に高畠町有機農業研究会というのを旗揚げしたのが1973年でした。

有機農業が地域社会から市民権を与えられるまでには、ほぼ10年の歳月を要しました。環境の問題とか教育の問題とか医療保険の問題なんかに積極的に問題提起をしたり力を出すという、いわば新しい村づくりの運動が

始まるようになりました。

自分たちが本当に必要とすること、学びたいことを学ぶために高畠共生塾を作りました。今では130名くらいの塾生をかかえて日常的な活動をし、場合によっては町づくりに様々な提案をするというところまで力量を高めています。また、立教、早稲田、千葉、筑波、明治とか東京農大とかいう首都圏の大学の学生が次々とやって来るようになりました。それはゼミのフィールドワーク、ワークキャンプと銘打って、田植え、若草取り、稲刈り、場合によっては果物の収穫というように、シーズン毎に冬を除いては春から秋まで都会の若者たちが次々とやってまいります。そのほかに高等学校の修学旅行とか小中学生の夏休み体験教室とか、行政やJAの職員（村おこし）が高畠町にやってきました。それを私たちのいろんな団体がそれぞれのケースで受け皿を作りながら、農業学習の場を準備してきました。

「まほらばの里農学校」と称する8月上旬に行わずが1週間の農業体験活動も、今年で8回目を迎えました。そこに参加した人々は、最初は若い人、20～30代の独身の男女が主流でしたが、最近では中年のサラリーマンとか定年間の熟年の方とか、かなり層が厚くなってまいりました。そこで1週間経験しただけで、一種のカルチャーショックを受け、何回も足を運び、ついにはだんだんと高畠病という病気が重くなっていってしまっ、ついには移住しないと直らないというやっかいな病気にまでなってしまうようです。ここ7年間で40数名、東京とか大阪の大都市を離れて移住してきた「新まほらば人」と称する新農民がでてまいりました。来春に向けてまた数名手を挙げておりますが、ほとんど空き屋を一軒借りて、田んぼや畑の農地も借りて丸腰から出発するんですが、それが挫折しないでうまくいくためには、地域住民の日常的な支援が必要なんですね。受け皿を作り、ここに定住してからもいろんな面で面倒をみてやる。例えばトラクターで耕して代かきをしてやれば、あとは手で田植えをすることが出来る。かつての「結い」のような関係で、何十人も一緒になって田植えする風景は、大変楽しく好ましい風景として写ります。

21世紀は人間が再び大地に還ってくる時代だと思っています。その中で必ずしも俺たちだけで守ってきた農村だから俺たちだけでやるという閉鎖的な殻を持たないで、それを打ち破って、外に向けて開いていく。場合によっては、海の向こうに向けても開いていくという、そういう懐が必要なんではなからうかと思ってます。次の時代にどいういうものを残していくのかというのを絶えず考え、未来へのつげではなくて、豊かなストックを子孫に残すということを大きなテーマとしながら、私たち大人は今を生きて行かなくてはならない。

多くの地域において新規就農者が定着しないなかで、高畠町に新規就農者が定着し、彼らとその地域社会や農業において重要な役割を果たしてきていることなど、高畠町の農業作家でもある星寛治さんが最近の農業・農政の動きを踏まえつつ、これからの新しい農業・農村のあり方を熱く語ってくれました。

#### 2. 「地域を活かせ村おこし」 …… ㈱農村開発リサーチ代表取締役 / 田中 満氏



経済的に今までは坂道を上ってきて今は下っている。坂道を上る時と下る時の歩き方が違うように物の考え方も変わらなくてはならない。昨日まで常識だったものが今日では常識になっている時代だと思えます。農村も変わらなければならぬんです。ハード面から快適な農村にしていかなければならないと思えます。効率的にそうしなくてはならないとしても用水路は全部コンクリートで固めるのではなく、せめて人目につくところは昔風の小川にするとか、大区画ほ場をつくるなら公衆トイレをつくるか、身近に子供たちが気軽に遊べる公園をつくるかハード事業の快適性、アメニティの側面が無いといけません。

それから「地域を活かせ村おこし」という本を出したんですが、その中で農業農村がゆで蛙になっている、なってしまうぞというようなことを書いてます。要はぬるま湯に浸かっ

ているということですが、蛙というのはぬるま湯の中に入れておいてじわじわ暖めていくとだんだんお湯は熱くなっていくんですが飛び出そうとしないそうなんです。今の農村の一般論としては、そのゆで蛙になっている、なってしまうのではないかと思っています。結局、農業農村は米に依存して、自分の農地さえ守っていれば良いという守りの意識しかない。それと役場の人にもいつも言っているのは、地域を管理するという意識から地域を経営するという意識に変わらなきゃいけないと喋っています。特に農山村の役場はそういう意識を持たないと、これから厳しいのではないかと考えております。

次に「農業の動向」ですが、新しい農業基本法の一歩の命題は食料自給率の向上だと思っています。米は余っているんです。高齢化、少子化で米の消費量が増えるはずがない。自給率を上げるためには大豆や小麦、あるいは飼料作物ではないかと思うんです。そうなると転作水田の集約は不可欠です。30、40歳代の若い連中は非常に良い経営感覚を持っていますが50歳以上の方は家業的農業をしていて、保守的な意識が非常に強い。今の時代、経営感覚を持っている若い世代が望まれているのではないかと思っています。特に米作りは技術の進歩により大規模経営やコストダウンなどができるので、時代にあわせて意識を改善していかなければならないと思います。では、中山間地域ではどうするか。そこはこだわりなんです。まさに高畠町で実践されている有機無農薬米とかそういったものが必要になってくる。農業の生産とか販売がいろんな意味で競争しながら共存する時代になると思っています。

それから農業農村の新しい世代、ニューリーダーの時代の話ですが、減反政策以降に農業に就いた方が農村で中心的役割を担う時代になりつつあると思いますが、この人たちの意識は違いますね。ユニークな農村活動や農産物直売活動というのを盛んにやってみたり、そういったものが非常に増えてきていると思うんです。今までは、村社会というんですか、村の原理というのがあったんですね。減反なんかというのはまさにそれを利用したんですね。村社会構造をね。それが効かなくなってくるんじゃないかと思うんです。役場や農協のお願いでも自分が納得しなければ、「うん。」とは言わない時代になるんじゃないかと思えます。そうなると役場や農協の指導が難しくなるのでしっかりとしなくてはならないと思います。

続いて「農村活性化の方策」についてふれてみたいと思います。